

ララの思い出

昭和21年6月21日、芝白金の厚生省の仮庁舎の社会局長室に、ララ代表のローズ女史とマキロップ神父の二人が、ララのありたい吉報をもって訪ねてくださったときの感激は非常なもので、当時の光景は今なおはっきり私の眼前に浮かぶ。当時国民一般は敗戦で打ちひしがれ衣食住のすべてに事欠きまったく手の打ちようとして、途方に暮れていたときでもあったからである。

ララ物資は初めは食糧が主で闇市などで調達術もなかった社会福祉施設に配分されたので、正に文字どおり旱天の慈雨で、もしララがなかったらと考えると、今でも肌に粟を生ずる思いがする。

昭和21年から昭和27年までの6年間、継続したララの義挙は、ララ物資が我が国の隅々にまで行き渡るに伴い、全国民から大変な感謝を受けた。当時の衆議院は、国民の総意において、昭和22年8月31日、昭和23年1月29日および昭和24年4月28日と三回、この恩義に対し、感謝決議文を採択し、ララ代表を通じて在米のララ本部に深甚な謝意を表明している。

ララ物資取扱いの直接の責任者だった私が、ひそかに誇りに感じているのは、この暖かい援助の賜物に対し、ララ物資の保管や配分などにつき、6年間一つの過誤やトラブルも起こさず、その責任を完全に果たして、厚情にこたええたことである。これについては、私の後任の宮崎次官、木村社会局長および水野、畠中、熊崎の三物資課長をはじめ多数の中央地方の関係者が、ララ配分の三大モットーであった効果的、公平、迅速を正確適正に処理してくれたおかげと感謝している。

ララの最初からその終了の後も、日本でのお仕事の関係で日本にとどまり、引き続きご懇意に願っていたローズ女史は、いつも私に会う度ごとに「ララは長い間お世話になりました。私どもはアジアの各地でララ救済事業をやりましたが、日本のあなた方のように、厳格適正によくやっていただいたものはありません。物資を間違えなく被援助者まで正確に届けてくださったことを私は誇りに思い、在米の寄贈者に代わって心から御礼を申します」と何回もおっしゃってくださったのを思い出す。私は、1978（昭和53）年の暮れに、フィラデルフィアのローズ女史から、クリスマスカードをいただいたが、そのカードには、「クリスマスと新年おめでとう」と印刷された後、ローズさんが自筆で、「あなたがララに尽くされたすべてに対し、感謝の思い出を込めて、エスタ、ピ、ローズ」と書かれてあった。そしてそのローズ女史は翌1979（昭和54）年の2月ご自宅で永眠されたので、くしくもこのカードはローズ女史の絶筆となった。私は今もなお大切に保存して、あのララ事業を我が国として立派に完遂しえたことを、ララの初めから終わりまでずっとその代表だったローズ女史から裏書していただいた誇りのうれしい思い出のよすがとしている。

元厚生事務次官 葛西 嘉資

大愛に感謝



戦いは終わった。すべてが灰になった。家も家族までも灰になった。中心学園は、横浜・川崎・満州で何もかも失った30名の戦災孤児を1948年11月20日より、保護・養育にあたった。

施設での生活は、生活物資に事欠き、とくに、育ちざかりの子どもたちにとって一番大切な食糧が不足していた。悲惨であった。常時、空腹状態であり、多くの子が、栄養失調で風邪も引いていないのに鼻から青汁を垂らしていた。冬になると、手足が赤切れとしもやけで痛みと痒みに耐えていた。

ララ物資が届いた。脱脂粉乳・チーズ・衣類等・貴重で最も必要な品々をいただいた。一条の光が差し込んだかのように、皆、よろこんだ。腹がよろこんだ。手がよろこんだ。全身でよろこんだ。心に光がついた。感謝である。大感謝である。

支援は続いた。大愛に抱かれ、栄養失調の身体も回復してきた。心も明るく、元気を取戻し、日々の生活に活気が出た。

多くの支援のお陰で、1952年3月、当園からの最初の中学卒業生を社会に送り出すことができた。

支援を受けたすべての者は、尊い思い出として、心の宝として、一生持ち続けていると思う。

ララの多くの方々の愛と真心と行動に感謝。神の計らいに感謝。合掌。

社会福祉法人 中心会

中心子どもの家 園長

加藤田 稔

人間愛のララ



昭和20年8月15日、日本の歴史への大きな終止符であり、日本人の生活の息が止まったかのような瞬間から、ある人びとは張り切った弓の糸が切れたように、また、ある人びとはかごから放された鳥のように、失意、放心、無気力、無秩序な生活をする者が、大都会に多かった。ちまたには、家や家族を失った子どもたち、羅災者、浮浪者、病气、いき倒れなど多くなり、犯罪、離婚なども増え、そして、無秩序な生活の産物として捨て子、私生児（混血児が多かった）が続出したが、収容施設も数少なかった。大人のベッドなどに動物のように並べ収容した。衣も食も薬剤もなく、人手もなく、死亡する老人、子どもなど数え切れない。ミカンの皮を拾って食べさせ、野草を食べた。

昭和23年7月に、ララ救援物資が配布され、施設の職員(医師、看護婦、その他)が涙を流して喜んだのを覚えている。ドラム缶で脱脂粉乳、衣類、野菜や、果物などの子ども用の缶詰め、毛布、おむつなど。古い衣類は、きれいに洗濯され、アイロンをかけてあり、すぐ利用できた。もっとも忘れられないことは、薬品を手にしたときの感動である。日本の国民病といわれた結核や、赤痢などが、目に見える早さでなくなり、死亡数は驚くほど減少した。

戦後10年、ララ救援物資のおかげで救われた、日本の今日の社会に成長したことは、日本の歴史のなかに永久に留めておかなければならないと思います。人間愛のララ救護活動へ感謝して、日本人は、いま、心から感謝と祈りをささげます。

社会福祉法人 チルドレンス・パラダイス
国府台聖愛乳児園施設長

齋藤 ヒデ

ララ物資ってなあに？

「ララ50年記念感謝の集い」のご盛會を祈念し、この暖かいたくさんの贈物を、わが国の多くの戦災者救護にお寄せくださったアメリカの皆様へ、深い感謝をこめて、心からありがたくお礼申し上げます。

私ども社会福祉法人多摩同胞会は、今のあきる野市網代に網代母子寮を建設しました。住居なく浮浪していた戦災母子たちにせめて定住の地をと念じ、いち早く救護にあたりました。

多くの人がとは食糧にこと欠き衣料など着のみ着のままの状態でした。旧軍人倉庫から軍服や毛布をわずか分けてもらい身にまといました。

そんな窮乏の折、アメリカの善意あふれるアジア救援のララ物資を私ども施設にもたくさん配分していただきました。本当に大助かりでございました。純毛のカラフルなセーター・スカート・スラックス等々そのまま着せていただいたり、子どもたちの体に合わせてつくり直したり、この素晴らしいおくりものに大喜びでした。「ララ物資ってなあに？」「神さまのおくりものかしら。」「アメリカ等外国からのプレゼントよ。」ララ物資に救われてあたたかく身にまとい遊んでいたあの頃の子どもたちが、なつかしく偲べれます。その子どもたちも早や60歳台。やがて高齢社会へと入っていきます。ララ物資は戦災者、とくに当時の子どもたちに虹のように美しく映えて、今なお脳裏に心のおく深く大切に保有されていると思います。

日本の復興に大きな力を与えてくださったアメリカの皆さん、ララ物資をありがとうございました。

※私は今年1月で95歳を迎えましたが、まだまだ元気で福祉の向上のためにがんばっています。
(1999年2月)

社会福祉法人 多摩同胞会 理事長 中城 イマ

※全社協主催1996年11月14日全社協灘尾ホール「ララ物資50年感謝の集い」へのメッセージから

「多々良紀夫氏著：LARA～救援物資は太平洋を超えて」より